

# 令和5年度 全国学力・学習状況調査 箱根町立小・中学校の調査結果について

令和5年4月18日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果を次のとおりまとめました。

## 1 調査の目的（文部科学省より）

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

## 2 調査の概要

箱根町では、4校101人の児童生徒が参加

（内訳：町立小学校3校6年生50人 町立中学校1校3年生51人）

## 3 調査内容

### （1）教科に関する調査（国語、算数・数学、英語）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等

※調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。

### （2）生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 （例）学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的な生活習慣等、家庭学習の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 （例）授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

## 4 調査時間

〈小学校〉

1 時限目	2 時限目	
国語(45分)	算数(45分)	児童質問紙(20～40分程度)

〈中学校〉

1 時限目	2 時限目	3 時限目	
国語(50分)	数学(50分)	英語(45分) 「聞くこと」・「読むこと」・「書くこと」	生徒質問紙(20～45分程度)

文部科学省指定日（4月21日） 英語「話すこと」

※生徒が活用する ICT 端末等を用いたオンライン方式により実施

## 5 結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の分析内容について

### ◆小学校【国語】

「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関して、今後も漢字や送り仮名について文や文章の中で正しく書くようにし、日常生活の中で相手や場面に応じて適切に敬語を使うことに慣れるようにしていくことが大切である。

「話すこと・聞くこと」は、選択式の問題で平均正答率が7割を超え高かった。一方、目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめる記述式の問題の平均正答率は7割を下回った。

「書くこと」については、米作りの問題点と解決方法について3つの情報を組み合わせて記述する問題1問のみであったが、グラフから分かることを記述していないなど、問題文の指示に従ってグラフを含めた複数の情報を用いて、自分の考えが伝わるように書き表すことに課題が見られた。正答率は2割を切り、全14問中で正答率は最も低く、無解答率も1割を超えた。

「読むこと」では、運動や食事に関する3つの資料を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる記述式の問題の正答率が5割を下回った。また、目的に応じて、文章と図表などを結び付け必要な情報を見付けることにも課題が見られた。

今後、目的に応じて複数の情報や資料を関連付けながら自分の考えをまとめられるような力を身に付けさせることが重要である。

### ◆小学校【算数】

本町の平均正答率は全国平均を下回る結果となっており、昨年度よりやや下降した。

「数と計算」では、( )を用いた式の意味や加法と乗法の混合した整数の計算に課題が見られた。「変化と関係」では、伴って変わる二つの量について、比例の関係を用いて知りたい数量の大きさの求め方と答えを記述することに課題が見られた。しかし、比例の関係ではない特徴を読み取り知りたい数量を求める設問、比例の関係ではないことを説明するために、表の中の適切な数の組を用いる設問では、両方とも9割という高い正答率であった。「図形」では、高さが示されていない複数の三角形について、それらの面積の大小を判断するのに必要な情報を見だし、その理由を記述することに課題が見られた。誤答の中には三辺の長さの積を求めようとしているものや解答類型にあてはまらないものが多かった。また、正三角形の角の大きさの理解についても課題が見られた。反面、正方形の意味や性質については9割の児童が理解できていた。「データの活用」では、二次元表の読み取りに課題が見られた。

問題形式別では、選択式や短答式に比べ、記述式の問題についての正答率が低い傾向が続いており、本年度は4割を下回った。図や式・言葉を用いて説明するなど、思考力・判断力・表現力を高める授業づくりが必要である。無解答率は、記述式の問題では高いものもあるが、半数以上の設問において全国平均より割合が少なく、全体的に粘り強く問題に取り組もうとした姿勢が感じられ、成果が上がっている。

#### ◆中学校【国語】

「話すこと・聞くこと」の平均正答率は8割を超え、「書くこと」では、根拠を明確にして文章を書く問題の正答率が高かった。「読むこと」の正答率は6割に満たず、表現の効果を理解したり、叙述を基に要旨を把握したりすることに課題が見られた。

例年、文脈に即して漢字を正しく書くことに課題が見られるが、今回の漢字の書き取りの正答率は5割に満たなかったため、引き続き漢字を正しく用いる態度と習慣を養うことができるよう指導することが大切である。「情報の扱い方に関する事項」では、情報と情報との関係について理解することに課題が見られたため、「意見と根拠」「具体と抽象」などの情報の関係を理解し、話したり書いたりする場面で活用できるように指導することが大切である。

問題形式別に見た平均正答率の差は、全国に比べて小さく、特に書くことが苦手という傾向は感じられず、日頃の授業での書く取り組みの成果が伺えた。今後も根拠を明確にしながらか自分の考えが伝わる文章や自分の考えが分かりやすく伝わる表現となるよう工夫していくことを大切にしたい指導が望まれる。また、自分の考えを広げたり深めたりするためには、新聞を含めた読書の意義や効用について系統的に指導していくことも効果的である。

#### ◆中学校【数学】

本町の平均正答率は全国平均を下回り、昨年度とほぼ同様の結果となったが、「数と式」では問題場面における考察の対象を明確に捉えて計算する問題が全国平均を上回った。また、「関数」では表やグラフの読み取りや解釈をする問題が全国平均に近い正答率となった。

各問では、正答率が全国平均を大きく下回った問題が15問中4問あった。うち3問は自然数・累積度数・四分位範囲などの意味理解を問う問題であり、0を自然数と捉えている誤答や、四分位範囲と範囲を混同しているなどの誤答が多かった。

記述式の思考・判断・表現の問題については、今年度も低い結果となった。文字を用いた式の変形はできてもその意味を説明できていなかったり、箱ひげ図や四分位範囲を用いてデータの分布の傾向を捉えられても、その判断の理由を数学的な表現を用いて説明できていなかったりした。また、図形では特に論理的に証明する力に課題が見られた。

今後は数学用語の意味理解などに丁寧に取り組む必要がある。また、問題場面について思考する過程や、結果の根拠について伝え合う等の活動を大切にしていきたいことが求められる。

#### ◆中学校【英語】

今年度、4年振りに実施された中学3年生の英語であるが、一番の特徴として挙げられる点は、「書くこと」の領域である。全国的にも正答率の低さと無解答率の高さが指摘される中、本町では他の領域（聞く・読む）は、全て無解答が0であるのに対して、「書くこと」では、5問全てに無解答が見られた。生徒にとって自分の意見や理由を英文で表すことが、いかに難しいことであるかを改めて痛感すると共に、基本的な語句・文法の理解や文章表現が大きな課題の一つであると認識を新たにした。

道案内や忘れ物情報など、主に「聞くこと」に関しては、耳から入ってきた内容をもとに正しく判断しようとする意識が表れていた。今後も、園小中一貫教育推進を基盤とする中で「英語を嫌いにさせない」指導に努めていく必要がある。そして、外国人との交流（おもてなし英語）を通して、できるだけ生きた英語にふれさせ、観光地箱根のよさを存分に生かしながら、少しでも実践的な英語力を身に付けていけるよう取り組んでいく必要がある。

(2) 児童生徒に対する質問紙調査結果の分析内容について

**【小学生の質問回答より】**

- 「自分には、よいところがある」と回答した児童が昨年度同様9割を超え、「人が困っているときは、進んで助ける」、「人の役に立つ人間になりたい」と回答した児童も9割を超えた。箱根ハートフルプログラムの実践や学校の全職員で児童をほめる・認める教育を推進してきたことが、児童の自己肯定感や自己有用感の高まりとして表れてきている。
- 「授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている」、「学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる」と回答した児童が、全国平均を上回った。授業で対話的な学びを取り入れたり、授業の終わりに自分の学びを振り返ったりする活動が習慣化したことで、自らの学びを実感し、次の学びへとつなげる意識が育まれてきていると考えられる。
- 「地域の行事に参加している」と回答した児童が、全国平均を大きく上回った一方で、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と回答した児童は、全国平均を下回った。また、「英語が好き」と回答した児童が、全国平均を大きく上回った一方で、「日本や地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたい」と回答した児童は、全国平均を下回った。箱根を愛する心を育むとともに、箱根のよさを発信するなど主体的に地域と関わっていくことができるように指導していく必要がある。
- 「タブレット端末等のICT機器の使用頻度」が昨年度よりも増加した。一方、「平日1日当たりの読書時間」について「30分以上」と回答した児童が、全国平均を下回った。本に親しみやすい環境づくりに努めたり、隙間時間を活用して読書をしたりするなど、工夫して取り組む必要がある。

**【中学生の質問回答より】**

- 「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」と回答した生徒が9割を超え、「国語・数学の勉強が好き」と回答した生徒も全国平均を上回った。生徒数が減少する中、生徒一人ひとりに丁寧に関わることができる小規模校の強みを生かして取り組んだ成果であると考えられる。
- 「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの活動に取り組んでいる」と回答した生徒が9割を超え、全国平均を大きく上回った。また、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」と回答した生徒も多く、総合的な学習の時間での探究のプロセスが、他の教科の学びにもよい影響を与え、自ら学ぶ意欲へとつながっていったと考える。
- 「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」と回答した生徒が全国平均を上回った。一方、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と回答した生徒が、全国平均を下回った。多様な考えにふれることのよさを感じ、自分の考えを深めたり広げたりすることができるように、各教科等の指導及び生徒指導に努めていく必要がある。
- 「授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている」と回答した生徒が、全国平均を下回った。また、「国語・数学・英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」と回答した生徒の割合も低い傾向にある。受験のための学習にならないよう、学習内容を日常生活と結び付けたり、教科横断的な視点で教育内容を配列したりするなど、各教科等を学ぶ本質的な意義を明確にした上で指導する必要がある。